



故 玉 置 日出夫 先生

玉置日出夫先生（2015年1月13日永眠，86歳）

▷略 歴◁

1928年11月12日	出生
1952年3月	京都大学農学部農林生物学科卒業
1952年4月	京都大学大学院農学部（旧制）入学
1958年2月	京都大学大学院農学部（旧制）退学
1958年10月～1962年3月	同志社女子大学専任講師
1962年4月～1968年3月	同志社女子大学助教授
1968年4月～1995年3月	同志社女子大学教授
1968年4月～1995年3月	同志社女子大学大学院家政学研究科教授
1995年4月～1999年3月	同志社女子大学特別任用教授
1995年4月～1999年3月	同志社女子大学大学院特別任用教授
1999年4月	同志社女子大学名誉教授
1972年4月～1975年3月	同志社女子大学教務部長
1983年4月～1986年3月	同志社女子大学教務部長
1987年4月～1988年3月	同志社女子大学教務部長
1978年4月～1980年3月	同志社女子大学家政学部長兼大学院家政学研究科長
1988年4月～1990年3月	同志社女子大学家政学部長兼大学院家政学研究科長
1964年9月～1965年8月	在外研究 米国シラキウス大学

▷学 位◁

農学博士

▷主な担当科目◁

微生物学，食品微生物学実験，食品微生物学，食品バイオテクノロジー，食品微生物学特論

▷所属学会◁

日本遺伝学会，生物物理学会，植物生理学会，日本生化学会，醱酵工学会，農芸化学会，酵母遺伝集談会

玉置日出夫先生を偲んで

長年食品微生物学研究室を主宰された玉置日出夫先生が平成 27 年 1 月 13 日に亡くなりました。平成 26 年の 8 月に、先生ご自身より年明けから調子が悪く治療していると伺ってはいましたが、それでも突然の思いはぬぐえません。その前の年まで毎年研究室リ・ユニオンにご出席いただいていたので、それきりお会いできなくなるとは思いもしませんでした。今となっては新実験棟を見ていただけなかったのが残念です。

実は、私は卒論は別の研究室で、修士課程で玉置先生の研究室に所属しました。修了一年後の昭和 62 年から研究助手として再び玉置先生のご指導の下で勤務することになり、ご退職までの 11 年間一緒にゼミを指導させていただきました。「食品微生物学」という研究室の立ち上げは昭和 37 年で、先生が着任された最初の 3 年半は応用生物学の小山松治郎先生と共同で卒論を指導されていたそうです。合計 40 年半のご在職中、応用生物学時代 46 名、食品微生物学発足後 487 名（助手、院生 11 名を含む）の計 533 名が先生のご指導を受けました。私はちょうど真ん中あたりの世代で、平成 11 年 3 月の退職祝賀会には私が生まれる前に卒業された先輩諸姉も出席され、長い歴史を感じました。平成 21 年に瑞宝中綬章を受章された時も、多くの卒業生が集まって祝いすることができました。

玉置先生のご専門は、デンブン発酵性酵母の研究とその利用や、細胞融合による異種遺伝子の導入など、酵母を主たる研究材料とした応用微生物学でした。私が修論生としてご指導いただいた頃ですが、他大学の発酵学教室の学生とコンパをした学生が玉置先生の名前を出したところ、「ええっ！あの細胞融合で有名な先生に直接教えてもらってるの？」と驚かれ、こっちがびっくりしたという話がありました。「玉置先生と言えば日本の細胞融合の四天王の一人だよ」と言われたのだそうです。そのことを先生に尋ねると、先生の恩師が戦後間もなくアメリカで学んだ細胞融合技術を 4 名の弟子に指導されたときに、それぞれ別の生物で研究するにあたって自分はお酒が好きだから酵母を選んだんだ、と。その話を伺ったのも確かゼミコンパで、普段は無口な先生がほろ酔いで楽しそうに話された記憶があります。その道では知る人ぞ知る立派な先生にご指導いただいているというありがたさも、皆酔っぱらってどこかに飛んで行ってしまったのは、きっと先生の飾らないご性格のせいだったのでしょうか。

玉置先生は京田辺校地開設と短期大学部、日本語日本文学科設置の時期に教務部長計 7 年と学部長を務められ、ご多忙でしたがほとんど愚痴など聞いたことがありませんでした。たまに院生が叱られたりしていましたが、幸か不幸か私は一度も叱られたことはなく、おおらかで前向きな玉置先生にいつも感心していました。この歳になって役職を経験すると、先生のように振る舞うのは簡単ではないことに気づかされます。

玉置先生が現役の頃、同女の七不思議の一つに「玉置先生は歳を取らない」というのがありました。いくつになっても背筋をピシッと伸ばされ、黒髪で若々しい先生に対して言われたことです。きっと先生のご自宅には地下に実験室があって、バイオで若返りの薬を研究しているに違いないと。それが食微ゼミの卒業生たちの自慢でもありました。なぜなら恩師がいつまでもお若い限り、自分たちも歳を取ったと自覚しないで済むからです。先生は私たちの持つイメージを一切壊さないで、そっといなくなってしまうれました。寂しいけれど、それが玉置先生の美学なのかもしれません。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

食品微生物学研究室 川崎 祐子